

# 読み聞かせにおける教師の自己修練（その二）

前田 真証

## はじめに

前号から、読み聞かせを行う教師がどのような力量をどう身につければよいかを課題とし、長年福岡県立図書館司書として読み聞かせに携わってこられ、福岡教育大学においても実地指導講師として平成六年以来指導をして下さっている川島久美子氏（現在久留米大学講師）の以下の二種の配布資料（※）を取り上げて、考察を試みている。

- (1) 「絵本の読み聞かせ」…読み聞かせの総論にあたるもの。
  - ① 読み聞かせの意義（三点）／② 読み聞かせの手順（原則と内容に応じた対応を要請）／③ じょうずな読み方／④ グループの読み聞かせに向く本を選ぶポイント（五点）について言及されている。…一枚
- (2) 「絵本の読み聞かせのポイント」…どういう絵本をどんなことに留意して、どのように読めばよいかという実践の指針を掲げられたもの。
  - ① 読み聞かせに合った本（五点）と② じょうずな読

み方」（七点）について述べられる。…二枚それを、

- (ア) 大きな振り所になった、松岡享子氏の『えほんのせかい こどものせかい』（東京子ども図書館、後に日本エディタースクール出版部、昭和四七―一九七二）年三月初版、新装版は昭和六二―一九八七）年九月五日発行、全二一―ページ）と照らし合わせて、異同を明らかにした上で、

- (イ) 読み聞かせに邁進された方の真意に迫り、
  - (ウ) 教師としてどのように自己修練すべきかを導き出そうとした。
- このうち、前号では、Ⅰ 本研究の目的と方法に続いて、Ⅱ 読み聞かせの意義・目標の見きわめ（(1)の①）Ⅲ 読み聞かせにふさわしい絵本の選び方（(1)④、(2)①）について検討していった。そこで、本号では、上記配布資料の
- (1) 「絵本の読み聞かせ」の「② 読み聞かせの手順」と

「③じょうずな読み方」、

(2) 「絵本の読み聞かせのポイント」の「②じょうずな読み方」(七点)

を取り上げて、松岡享子氏の著書と照らし合わせて記述の意図を探り、絵本を読む手順・読み聞かせに関して、教師としてどのような自己修練が必要かを明らかにしていきたい。

※ 上記の二種の資料は署名がないので、福岡県立図書館で読み聞かせの拠り所として共通に用いられているものかもしれない。それにしても、川島久美子氏は作成の主要なメンバーとして加わったと推察されるため、以下の論旨は基本的には変わらない。

#### IV 読み聞かせの手順と読み方

文献(1)「絵本の読み聞かせ」には、以下のように読み聞かせの手順も、読み方も簡明に記されている。

「(2) 読み聞かせの手順

〔(1)「読み聞かせの意義」へ原則〕に続くもの〕  
表紙を見せ、題名を読む↓見返しを見せる(本文への導入)↓標題紙を見せる↓本文を読む↓裏見返しを見せる↓裏表紙を見せる↓再度、表紙を見せ、題名を読み、『おしま』。

但し、原則は原則であって、例外的なものもあるので、

原則はふまえながらも、本の内容により臨機応変な対応が求められる。

(3) じょうずな読み方

じょうずな読み方とは、読んでもらったあと、子どもの心の中に、お話の世界が残るような読み方をいうのであるから、きちんと本を選び、心をこめて、ゆつくりはつきり、読めばよい。

また、読んだあとで子どもたちにいろいろ質問したりせず、子どもが絵本から受ける素朴な感動を大切にしたい方がよい。」

それに対して、文献(2)「絵本読み聞かせのポイント」には、読み聞かせの手順には言及がなく、「じょうずな読み方」のみ、紙面を費やして、次のように掲げられている。

その1 安定したもち方

子どもがいすにすわっているときは、読み手が立ち、床にすわっているときはいすにすわるとよいでしょう。どの子からも絵本が見えるように、また絵本がぐらつかないように。

その2 開きぐせをつける

開きがわるいと、はしにすわった子どもは絵が見にくくなりますし、読み手も本をもった手でページを押しひろげなければなりませんから、力がいってたいへ

んです。

そこで、絵本には前もって開きぐせをつけておきましょう。開きぐせのつけ方は、まず本の背を机などのかたくて平らな面におき、片側の表紙だけを開いて、表紙のつけねをはしからはしまでしっかり押します。はしが浮き上がらなくなったり、反対側の表紙も同じようにします。

### その3 めくり方

ページをめくるときは、手を絵本の上か下へかけるようにして、腕で画面をかくさないように気をつけましょう。物語が勢いよく流れているところでは、前もってページのはしに手をかけておき、スムーズにめくれるように準備しておくことです。ページをめくるときのたついたり、二枚一度にめくって、あともどりしたりしては興がそがれます。

### その4 読む速度、めくる速度

ページをめくるのもお話のうちで、お話の流れによって、めくり方の速度もいろいろかわってきます。ゆっくりめくって、長い時の感じを出したり、さっとめくって勢いをだしたり……。また文を読み終わったら、すぐめくるというのではなく、お話の流れを考えて、子どもたちに絵を見る時間を与えることも考えましょう。文(章)がない場面でも、絵に見るべきものがたつぷ

りあるところは、十分に見せましょう。

### その5 めくった瞬間は読まない

新しい場面が現れたときは、子どもの注意は絵に集中しますから、その瞬間は読まないことです。絵が現れ、子どもがパツとそれを見てとったあと、お話の聲が聞こえてくるというふうにしたいものです。

### その6 絵と文の調整

ページ数やレイアウトの関係で、絵と文のかみあわせが必ずしもうまくいっていない場合は、読み手のほうで、適当に調整しましょう。とくに、絵を先に見せると話がわれてしまうところでは、それが必要です。

### その7 ゆっくりと心をこめて

以上のような注意をしたら、あとはゆっくりと、心をこめて読んでください。あまり技巧にとらわれず、自然に読むことが大事です。いわゆるうまい読み方より、読み手がその絵本を楽しんでいることが、聞いている者にもひとりでに伝わってくる読み方のほうが、ずっといいのですから。

川島久美子氏の以上の説述は、次のように松岡享子氏の『子どもとせかい えほんのせかい』ともおおむね一致している。

川島久美子氏の説述

文献(1)「絵本の読み聞かせ」

(2) 読み聞かせの手順

(3) じょうずな読み方

○読んでもらった後、子どもの心の中にお話のせかいが残るように、心をこめて、ゆっくりはつきりと読む。

○子どもが絵本から受ける素朴な感動を大切に、すぐに反応を引き出すのは避ける。

文献(2)「絵本読み聞かせのポイント」

「じょうずな読み方」

その1 安定した持ち方

その2 開きぐせをつける

その3 めくり方

その4 読む速度、めくる速度

その5 めくった瞬間は読まない

その6 絵と文の調整

その7 ゆっくりと心をこめて

松岡享子氏の説述

子どもを本の世界へ招き入れるために

すなおに、飾り気なく、そしてできれば心をこめて読んであげてください。それが、いちばんいい読み方だと思います。

物語絵本は楽しむもの……どうぞ、質問魔、説明魔にならないで下さい。

「グループの子どもたちに絵本を読み聞かせるために」の「2 読み方」

安定したもち方

開きぐせをつける

読みはじめ

めくり方

読む速度、めくる速度

ページをくった瞬間は文は読まない

絵と文の調整

ゆっくりと心をこめて

位置づけが異なっているのは、松岡享子氏が「読み方」の三番目に入れている「読みはじめ」を「読み聞かせの手順」として独立させ、原則と応用について言及している点である。このことに着目して川島久美子氏がこのように掲げられた意図を推察すれば、次のように考えられよう。

(1) どんな順に読んでいくかの明示

松岡享子氏の「読み方」は、読み聞かせをする場に入った過程を想定して、「安定したもち方」(教師が子どもたちに向き合い、絵本をどう持てばよいか)↓「開きぐせをつける」(上記の持ち方が続けられるために事前に絵本をどう開きやすいようにしておく必要があるか)↓「読み始め」(どう読み始めていくか)↓「めくり方」(その後どのようにページをめくる準備をしておくか)↓「読む速度、めくる速度」(お話の流れに応じて、めくる速度にも変化が求められる)↓「ページをくった瞬間は読まない」(新しい場面が現れた時には絵に集中する幼児の思いを汲んで、その上で読むようにする)↓「絵と文の調整」(絵と文とがき合っていないところは、読み手が補って読むことが不可欠になる)↓「ゆっくりと心をこめて」(以上のことを注意した上で、読み方として心がけるべきこと)と述べている。これらは、いずれも大切であるが、実際にどんな手順で絵本を読んでいくかという点が、埋没してしまう懸念もある。その

ため、川島久美子氏はそれを最初に持ってきて、このような手順を念頭に置いた上で、絵本を読んでいく際に心がけていくべきことを以下に掲げる形にされたようである。

(2) じょうずな読み方に対する基本方針の明確化

「じょうずな読み方」というのが特別にあり、修練を積んだ人だけができるように思うと、むしろ教師が自ら練習しようとする意欲を減退させてしまうことにもなりかねまい。そこで、川島久美子氏は、松岡享子氏が『子どものせかい えほんのせかい』の第一章にあたる部分に説かれたことを取り込み、真に「じょうずな読み方」というのは、「読み方がうまいなあ。」などと、こどもの気持ちにそらせることなく、作品世界そのものにひたarse、「読んでもらったあと(も)、子どもの心の中にお話の世界が残るような読み方をいう」としている。そのためには、前号にふれたように「きちんとした本を選ぶ」ことが前提となるが、後は「心をこめて、ゆっくりはつきり、読めば良い」のである。このように考えれば、今から取り組むばあいでも、安心してできるかぎり「心をこめて、ゆっくりはつきり」読もうと努められるのである。ただし、心をこめようとすれば、心をこめられるように絵本の世界に教師自らひたつておく必要がある。ゆっくりはつきり読むためにも、安らかに声が出せるように

繰り返し読んでおくことが大切である。したがって、絵本の読み聞かせ方について、入りやすく、しかもいくらかでも練習を積み上げられる方針が示されたことになる。「読んだあとで子どもたちいろいろな質問したりせずに、子どもが絵本から受ける素朴な感動を大切にしたい方がよい。」という付記があるのも、読んでいる最中に楽しむことにとどまらず、感動経験を胸に刻んでもらおうとして読み聞かせをしたのであるから、根づいていくかどうか、あたたかく見守る必要性を説かれたものであろう。ここでは、読み聞かせがその場にとどまるものではないことが明確に打ち出されている。

(3) じょうずな読み方に至る筋道の理解

松岡享子氏の「読み方」のうち、「読みはじめ」の項を抜いた七項目の配列は、目標としていることを基準にすると、以下のように三層に分けることができる。

A 絵をしつかり見せるため

「その1 安定したもち方」・「その2 開きぐせをつける」・「その3 めくり方」が、ここに入る。「その1 安定したもち方」は、子どもたちに対して、どう対面し、絵本をどう持てば最後まで安定して読むことができるかを予め考えておくこと、「その2 開きぐせをつける」は、絵本そのものも開きやすいようにどのページも事前にしつかりおさえておき、どこにす

わっている子も見えにくくならない準備をしておくことが指摘されている。「その3 めくり方」は、読み上げているその場で直前に用意するしかないことであるが、前もって手をページのはしにかけておき、めくる時にはすみやかにできるようにすることを促している。

子どもたちは絵本を目にしつつ、耳で教師の声を聞くのであるから、これらは読み聞かせの声を聞くようにするための土台を作り上げるものと言えよう。

B 絵を見ることとお話を聞くこととの調和をはかるため

この項には、「その4 読む速度、めくる速度」・「その5 めくった瞬間は読まない」・「その6 絵と文の調整」が含まれる。「その4 読む速度、めくる速度」は、お話の流れに応じてめくる速度を自在に変化させることが説かれている。「その5 めくった瞬間は読まない」は、新しい場面が目の前に現れてきた時、絵を見ることが優先し、すこし間を置いてお話の声を聞く余裕ができてくるため、そのことを配慮するようにということである。「その6 絵と文の調整」は、絵を見ながらお話を聞く際に、子どもに違和感が生じないように教師が暗記しておいて補った上で次のページに移るなど、特別な工夫が必要ならばいいである。

これらは、教師の絵本の教材研究によって、どんな速度でめくるのか、どのくらい待って声を出せばよいか、どこを補って読めばよいかという見通しがつけられるものである。

C 絵本の楽しさが伝わり、心の中にお話の世界が残るようにするため

「その7 ゆっくりと心をこめて」がこれに属する。その1からその6まで「じょうずな読み方」の前提となる「その1 安定したもち方」・「その2 開きぐせをつける」・「その3 めくり方」や、絵を見ることがお話を聞くこととの調和をはかるための留意点、「その4 読む速度、めくる速度」・「その5 めくった瞬間は読まない」・「その6 絵と文の調整」が挙げられてきた。したがって、狭義の「じょうずな読み方」そのものに光を当てた項目は、この一項目のみである。しかし、それはどのような技巧を用いてうまく読むかを説くものではなく、「自然に」「ゆっくりと心をこめて」読むことを勧めるものである。そして、「うまい読み方」と対比させて、「読み手がその絵本を楽しんでいることが、聞いている者にも、ひとりで伝わってくる読み方のほうが、ずっといい」と説かれている。読み手がその絵本を楽しんでいることが自ずと伝わるためには、松岡享子氏の本では「物語の流れに乗る」

(二二四ページ) 必要があり、「自分で物語を語る気持で」読めるようになっていくこと(二二〇ページ)が不可欠であるという。絵本の読み聞かせは、わがことを語り聞かせる境地に至ってほんものになり、子どもの心に刻まれるものになるといえる。

ここまで来ると、なぜ「自然に読むこと」が大事かが、わかってくる。読み手は、技巧で「じょうずな読み方」を演じるのではなく、その絵本に感動し、その世界に生きていることを、まるごと自然に表せばよいのである。聞き手は、その声に素朴ではあっても、読み手の肉声(物語を通して伝わってくる心の響き)を感じ、物語の世界にともに入りこむきっかけを得、その世界を心に宿すのである。

以上の考察を経て、絵本を読む手順・読み聞かせ方に関して教師の力量をつけるとすれば、下記の点が導き出せよう。

(1) 絵本をどこからどんなふうに読んでいくかという標準的な手順の理解は、その絵本のいとおしさを知っているからこそ正式に扱うという気構えを養うであろう。本文を読み終わった後に、裏見返しを見せる→裏表紙を見せる→再度、表紙を見せ、題名を読み、「おしまい」にするということも、教師が絵本を大切に思っていることの表れであり、学習者がこのお話の余韻を楽しむ時間にな

ろう。また、内容による臨機応変の扱いは、原則にとりながらも、この絵本のばあいは、どこからどのように読んでいくのがふさわしいかを考える余地を与えてくれよう。

(2) いろいろな読み方に対する基本方針の確立は、読み聞かせをしている最中の子どもを観察するにとどまらず、読んだ後、心の中にお話の世界が残る読み方になつていたかどうか見守る目をもたしめてくれよう。また、取り組みやすく、達しがいな読み聞かせの修練の性質を知つて、倦まずたゆまず「心をこめて、ゆつくりはつきり」声を出して読む練習にいそしもうとする根本的姿勢を固めることになろう。

(3) 具体的な読み聞かせをする際には、前提として絵をしつかり見せるために、安定したもち方をする事、絵本の開きぐせをつけること、めくる用意をして読んでいくことという三つの準備があり、しかも子どもにとって、絵を見ることとお話を聞くことが調和でき、読み手の読む楽しさが伝わってくるような読み方が求められる。これらについて一回一回の試みを記録し、内省することは、続けていけば教師の一大拠点にもなろう。生涯で何回読み聞かせができるか、何冊取り上げられ、どのような時に聞いている子どもたちと一体になれたと思えたのか、このような記録が残され、蓄積されていけば、教師本人

の力量形成の足跡となり、生き甲斐となるばかりか、後に続く者の得がたい指針になろう。

(まえだ しんしょう・本学教授)